

# シンポジウム 「近代の人間モデルとフェミニズム」 を終えて

これまでにもいろいろな立場から、近代は問題化されてきている。

フェミニズムも、一面で近代のプロジェクトの完遂と見なしうるが、他面、それは近代への根本的批判の思想でもある。その場合に想定されている事態は、近代は、人間の人間による人間のための世界を作り出そうとした時代であり、その「人間」とは男性のことであった、という事態である。そして、我が敬愛する哲学者たちも、そうした事態の創出に加担していた。哲学という知の内部で、フェミニズムの告発を受けて事態を反省するとどうなるか？それがシンポジウムの主題だった。

石川伊織氏は、ヘーゲルを吟味にかけた。曰く、ヘーゲルは、近代の個人主義的（独我論的）個人を批判しようとする。解かれるべき問題は、1自由自立と共同性の両立の問題、2人間の社会性と自然性

## 細谷 実

との両立の問題であった。ヘーゲルは、それらを、国家・市民社会・家族の区分、およびそこへの諸主体の性別による配置によって解こうとした。1はさておく。2は、国家・市民社会を社会性の領域、その社会性を生きる存在としての男性、家族を自然性の領域、その自然性を生きる存在としての女性、という構図で解かれる。しかし、男女を一単位としてではなく、個人として見た時、女性は社会性から疎外され、男性は自然性から疎外されているのである。このように、近代をある意味で相対化したヘーゲルの構想も、フェミニズムからの審判に耐えられない。と同時に、男性並み主体化路線を採るフェミニズムの困難も示唆している。

古田睦美氏は、経済学を吟味にかけた。曰く、プロレタリアートという主体の想定に基づく経済学は以下の4つの偏向を持っていた。男性優位主義、白

人優位主義、ヨーロッパ中心主義、生産力中心主義。マルクスが、全世界的に普遍的存在になり未来社会のモデルとなるものとしたプロレタリアートも、実は局在的で特権的なものであった。つまり、植民地からの富で国内融和を保てる中心部先進諸国の男性労働者以外には原理的にも実際にも広がりを持たない。マルクスの生産パラダイムにもかかわらず、資本主義も、狩猟時代からの略奪パラダイムに基礎を持つものである。まさに、社会と自然の二分法をとる男性的思考法が、そうした事態をこれまで隠蔽して来た。

田崎英明氏は、近代哲学・社会思想が想定する「何かを始める主体」を批判し、さらに、人間―自然関係への脱近代的イメージを提案した。「何かを始める主体」とは、社会契約・婚姻契約・労働契約などの契約を始める主体、あるいは生産を始め、富を作り出す主体である。フェミニズムは、婚姻契約・売春契約などを論じる中で、「何かを始める主体」の想定を批判している。むしろ、人間は、常に既に始められている様々な物語の中に生まれ込む。その点は、ヘーゲルやコミュニタリアンの主張と重なるが、彼らと違い、物語は単一なものではなく、

ハイブリッド化されシャッフルされた無数の物語であると見るべきだ。自然もゴロつと存在するものではなく、一つの物語として人間と関係する可能性を持つている。人間の内なる自然も、実は、多くの物語と同様に、人間主体の中でハイブリッド化されている一断片として捕らえうる。例えば、女性の生理や受胎という出来事も、様々に語られる可能性を持った断片として、女性主体を構成する断片となりうるだろう。その意味で、取り替え可能な諸断片から作られたサイボーグこそ人間主体のモデルかもしれない。

それぞれのパネリストの詳しい議論はそれぞれの文章を参照して欲しい。ともあれ、フェミニズムの中で、男仕立てで作られた近代の主体の想定といくつかの物語が再審にかけられていることが確認される。なお、エコロジ―的自然と共鳴する古田氏とフランクフルト学派の自然理解と共鳴する石川氏とサイボーグ・フェミニズム(ダナ・ハラウェイ)と共鳴する田崎氏との間には、とりわけ自然理解をめぐって、大きな対立があるように思われるが、当日のシンポジウムでの討論においてそこは主題化されなかった。